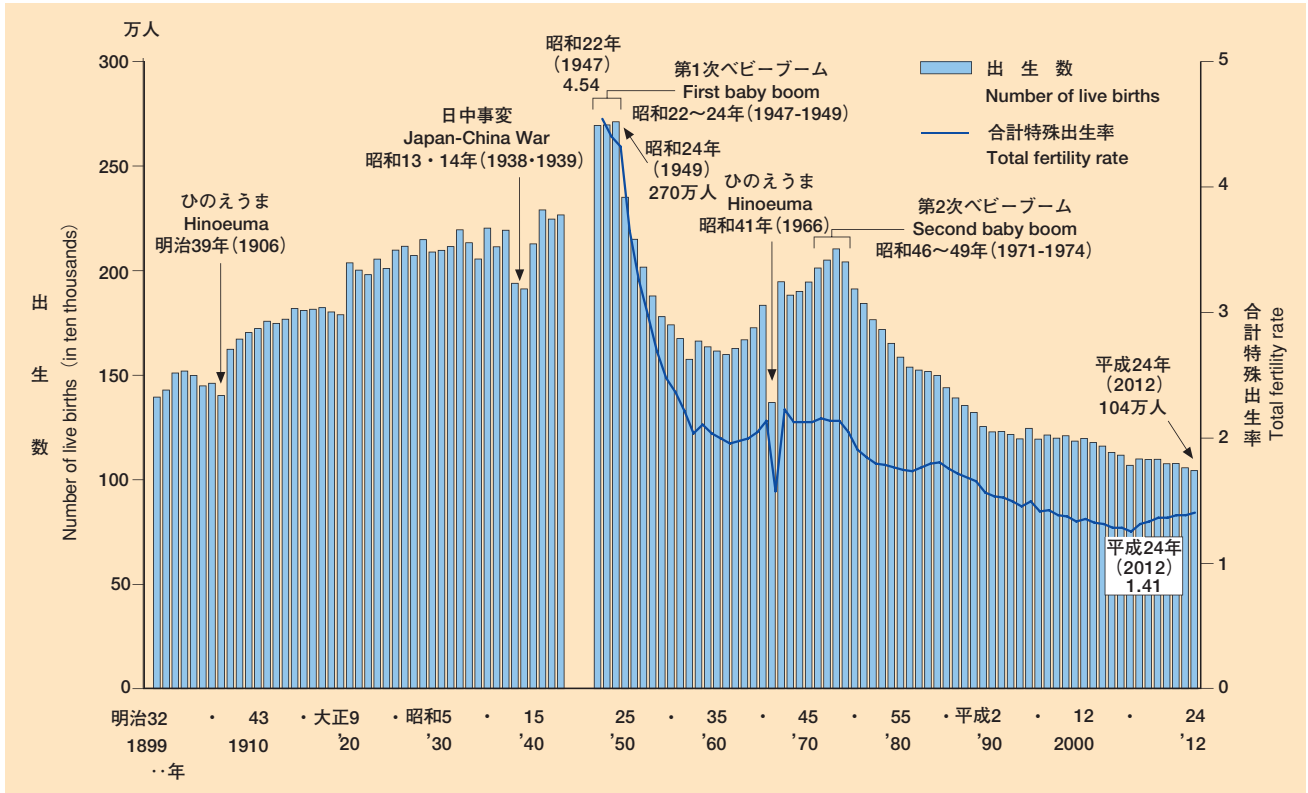


# 出生の動き Natality

出生数は減少・合計特殊出生率は上昇

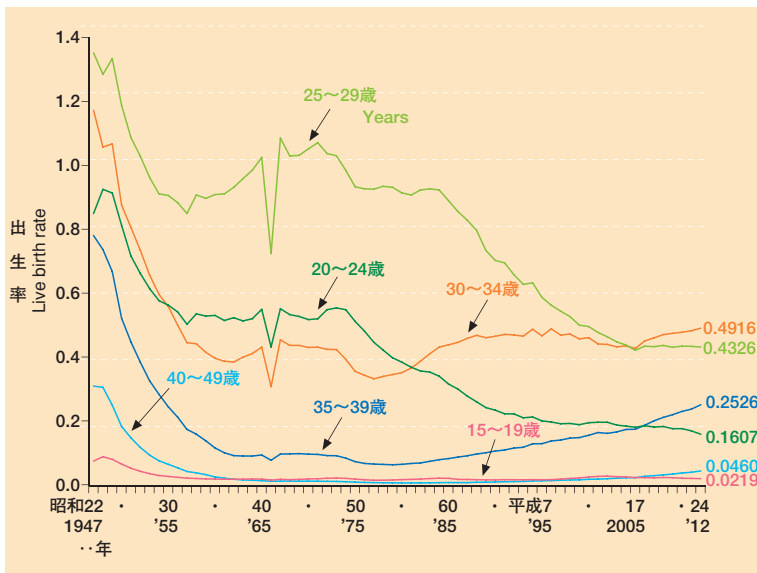
出生数及び合計特殊出生率の年次推移—明治32～平成24年—

Trends in live births and total fertility rates, 1899—2012



母の年齢階級別出生率の年次推移—昭和22～平成24年—

Trends in live birth rates by age of mother, 1947—2012



注：母の各年齢別出生率を足し上げたもので、各階級の合計が合計特殊出生率である。

出生数の年次推移をみると、第2次世界大戦前は戦争のあったときを除いて増加していたが、戦後は、昭和22年から24年の第1次ベビーブーム期と46年から49年の第2次ベビーブーム期に200万人を超えたのを除いて、減少傾向にあった。平成元年以降は120万人前後で推移していたが、13年からは5年連続で減少した。18年から23年までは増減を繰り返しており、24年は103万7231人で、前年より1万3575人減少し、統計の得られていない昭和19年から21年を除き、現在の形式で統計をとり始めた明治32年以降最低となった。

合計特殊出生率は1.41で前年の1.39を上回った。合計特殊出生率の年次推移をみると、第1次ベビーブーム期には4を超えていたが、昭和20年代後半に急激に低下し31年には2.22となり、初めて人口置き換え水準\*（同年2.24）を下回った。その後、46年までは「ひのえうま」前後の特殊な動きを除けば緩やかな上昇傾向にあり、第2次ベビーブーム期の47、48年には2.14となった。その後は低下に転じ、50

年に2を下回ってからは、50年代後半を除いて低下傾向が続いていたが、平成18年からは3年連続で上昇した。21年は前年と同率となったが、22年は上昇し、23年は前年と同率、24年は上昇した。

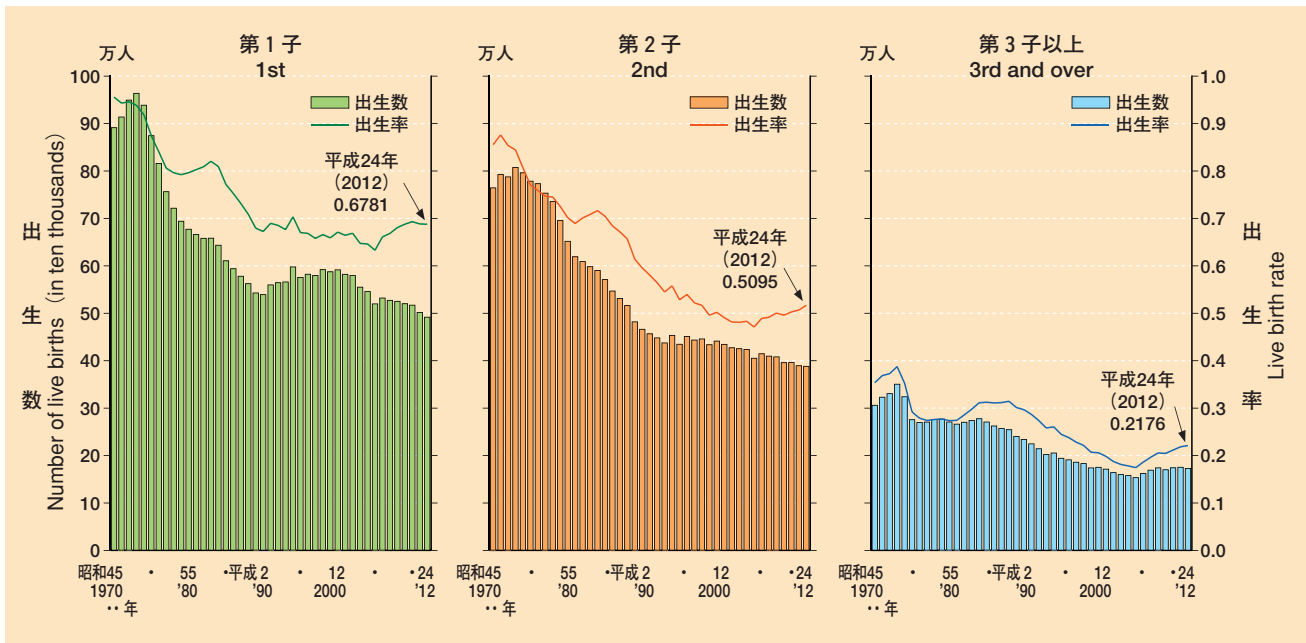
母の年齢階級別出生率の年次推移をみると、昭和50年代以降は20歳代の出生率が大きく低下し、近年は30～40歳代の出生率が上昇傾向となっている。

\*人口置き換え水準とは、人口が将来にわたって増えも減りもしないで、親の世代と同数で置き換わるための大きさを表す指標である。人口置き換え水準に見合う合計特殊出生率は、女性の死亡率等によって変動するので一概にはいえないが、日本における平成24年の値は2.07である。なお、人口置き換え水準は、国立社会保障・人口問題研究所で算出している。

出生数はすべての順位で減少、合計特殊出生率は第2子、第3子以上で上昇

出生順位別にみた出生数及び合計特殊出生率（内訳）の年次推移—昭和45～平成24年—

Trends in live births and total fertility rates by birth order, 1970-2012

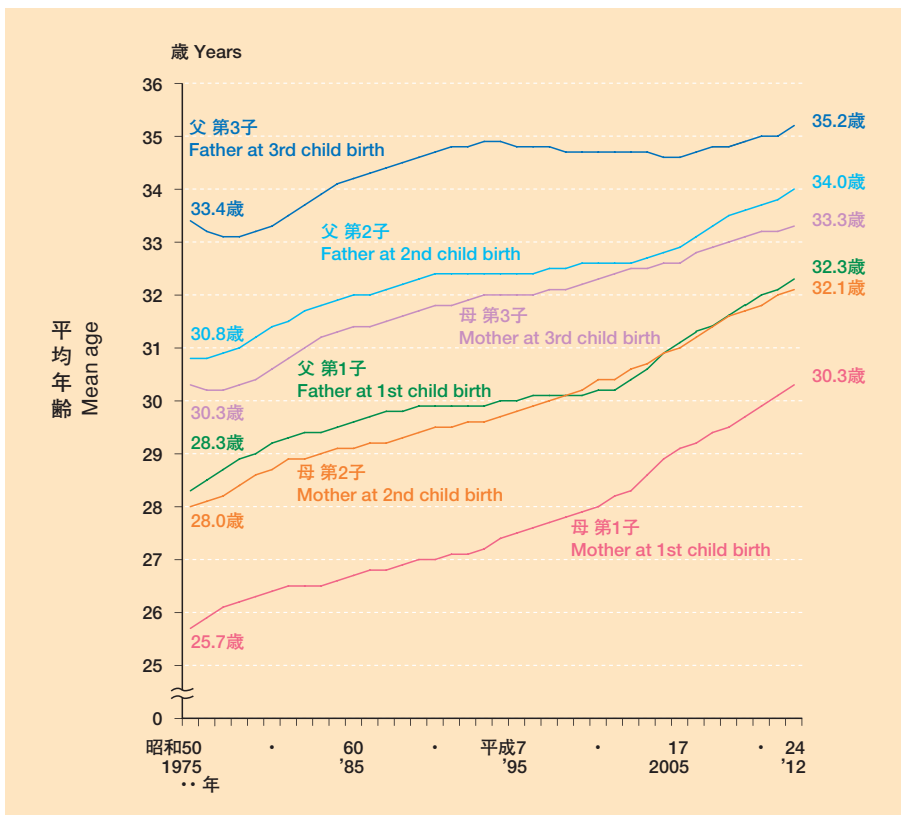


注：1）出生順位とは、同じ母親がこれまでに生んだ出生子の総数について数えた順序である。  
 2）出生順位別の出生率の数値は出生順位ごとに15歳から49歳の母の各歳別出生率を合計したものであり、第1子から第3子以上の出生率を合計したものが、合計特殊出生率である。

父母の平均年齢は上昇

出生順位別にみた父母の平均年齢の年次推移—昭和50～平成24年—

Trends in mean age of father and mother by live birth order 1975-2012



出生順位別に出生数の年次推移をみると、出生数はすべての出生順位で第2次ベビーブーム期（昭和46～49年）に多くっており、その後は第1子の平成3～12年を除いて減少傾向となっていたが、18年にはすべての出生順位で増加した。19年以降は第1子、第2子は減少傾向にある。

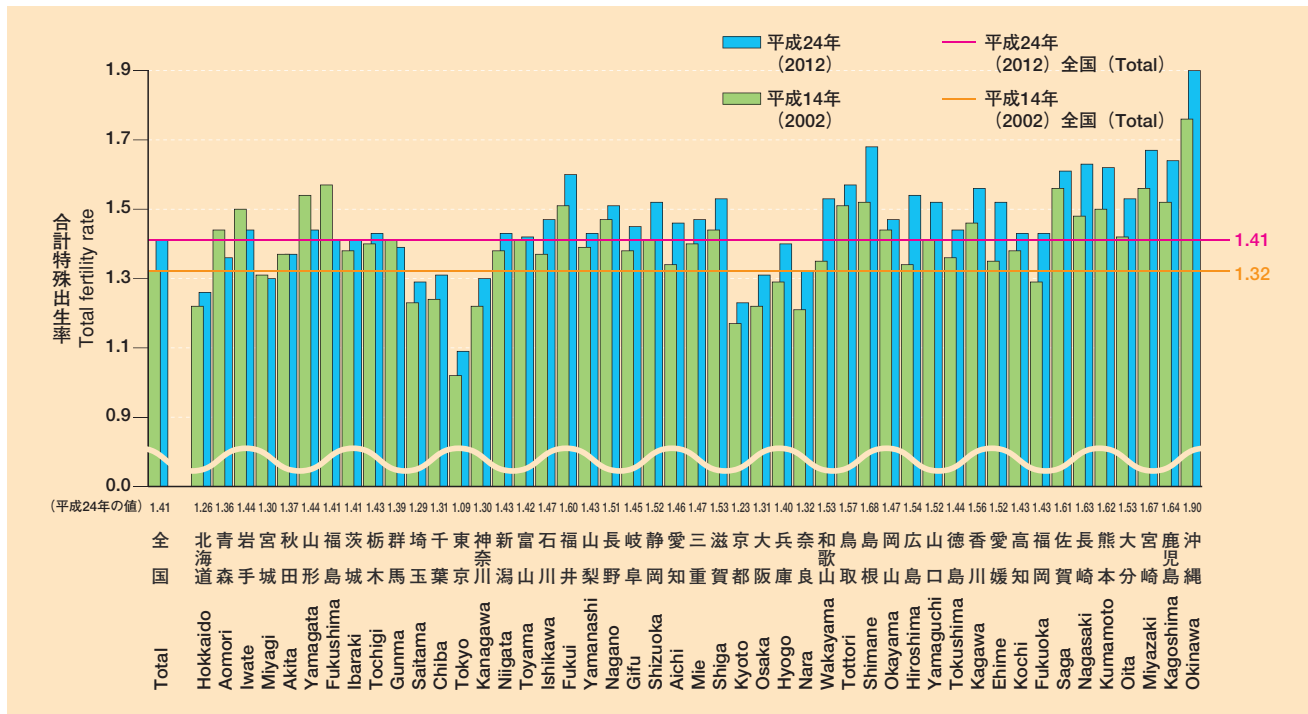
出生順位別に合計特殊出生率（内訳）の年次推移をみると、第2次ベビーブーム期以降、昭和50年代後半を除いてすべての出生順位で低下傾向となっていたが、平成18年以降は上昇傾向となっている。23年以降は第1子は低下、第2子、第3子以上では上昇している。

出生順位別に母の平均年齢をみると、平成24年は第1子は30.3歳、第2子は32.1歳、第3子は33.3歳となっており、昭和50年に比べ、それぞれ4.6歳、4.1歳、3.0歳上昇している。

父の平均年齢は、平成に入ってから一旦横ばいとなったが、近年は再び上昇しており、24年は第1子32.3歳、第2子34.0歳、第3子35.2歳となっている。

10年前と比較すると、合計特殊出生率は40都道府県で上昇

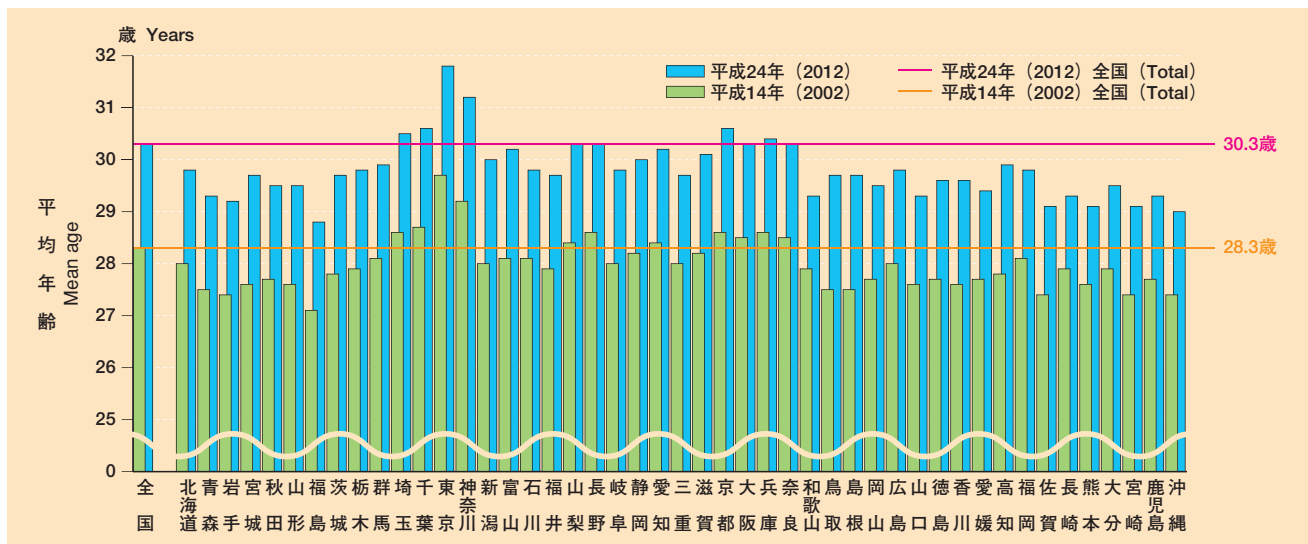
都道府県別にみた合計特殊出生率の年次比較—平成14・24年—  
Comparison of total fertility rates by prefecture, 2002・2012



注：分母に用いた人口は、全国は各歳別日本人人口、都道府県は5歳階級別総人口である。

母の平均年齢は大都市を有する都道府県で高い

都道府県別にみた第1子出生時の母の平均年齢の年次比較—平成14・24年—  
Comparison of mean age of mother at first child by prefecture, 2002・2012



平成24年の合計特殊出生率を都道府県別にみると、最も高いのは沖縄1.90、次いで島根1.68、宮崎1.67となっている。一方、最も低いのは東京1.09、次いで京都1.23、北海道1.26となっており、おおむね大都市を有する都道府県とその周辺で低い傾向がみられる。

都道府県別に平成24年と14年の合計特殊出生率を比較すると、最も上がり幅が大きかったのは広島で0.20、次いで和歌山0.18、愛媛0.17となっている。一方、最も下がり幅が大きかったのは福島で△0.16、次いで山形△0.10、青森△0.08となっている。

都道府県別に第1子出生時の母の平均年齢をみると、東京、神奈川、千葉、京都、埼玉などの大都市を有する都道府県とその周辺で高くなっている。平成24年と14年を比較すると、すべての都道府県で1.4~2.2歳上昇している。